

評
尚風過雅義
一

尚風過雅義
全部五冊
百三十八

特
遠13
1854
1



八達13
1854
15

尚風過謙義序

下手謙義
前後評判

甲斐屋老衛門
湯嶋

四十餘年もの昔の事。此
右風と足との情。尚風試稿の
何様お急と云ふ思。稿は下手談
我々も都合次第の細紙稿
う世せらる小書を破し
氣は引き合ふ人。虚と云ふは
巻子

尚風十卷義序

五卷
三

高々。三月。の。初。乃。过。後。我。此。也。
 音。其。聽。同。法。人。之。點。歌。あ。は。は。
 南。世。妙。法。蓮。花。經。

東都谷中住

嫌阿弥陀佛

当风过静義慈目錄

任州
 中屋光衛門
 湯嶋

○ 彼前乃大後乃が童芝花此作者と稱弟

せし事

○ 穢穢が末子し衣毎び奈家海り事

○ 甘味板は界寺書状の反詞せし事

○ 辨賊天豊後節とかめ給ひし事

○ 同懐のなすほる此云紙し事

同懐のなすほる此云紙し事

○後教前教法山依の云依らる事



高僧遺教義卷一

下在諸教 藥師金剛經 娑婆述

○大教内が盡き居の作者と稱せし事

支持はた名者。福不可量とあるは。佛經に虚偽の
文を著せしむ。佛に依りて教を授けしむ。さるる事
余氣うとく。兔角経に首由旬外とある。佛の
衰意のそとく。文にかけりてとある。目おのまはらと
情出しとるん。所地は軍悟。日よれたるも。
法業の人の行法。自教得れとる。指れし。佛の
是はと中と。佛偈師と。むけりてとる。六十日と。悔意

去作の掃をアノに猪の集るが墓所を函臺
 小出合し。法味と意夜せひおし。法分細い
 勝を海よりよとく。カガとらんくと踏まこと
 誰とくおらん。我我の江戸とつ。日本一乃
 都ぐ。胡言承の飯喰く生育。はるれ回念
 昔とは格別強。男あり。まは法死の伝者れ中
 て。二書とらぬ。鬼子母神の加護の河。鳥井
 町の筑ちつら。題目儀れ席でも。味香謙政中
 とを海せし。本根小大湖体つ。まは法分細い

理居合ふ。比宗と因は。まは法分細い。世の
 の海也。遊果お怖る。まは法分細い。信ハ
 悔らく。揮出と。勝ま。まは法分細い。お
 し。まは法分細い。まは法分細い。まは法分細い
 近年。まは法分細い。まは法分細い。まは法分細い
 弱者あり。まは法分細い。まは法分細い。まは法分細い
 の。まは法分細い。まは法分細い。まは法分細い
 子。まは法分細い。まは法分細い。まは法分細い
 男。まは法分細い。まは法分細い。まは法分細い

書の上巻第一

四



物終りてんてつふ紙は波馬後の跳を糸結後
乃終るを其居の作者一の教訓とありとて
歴情者存生の時おのりて左教抄く大砥
小砥化糖板の押時と控取の勿後山中富が
の呼出し。浦りこれ跳あらじ。船が長の子
とつてぬ里もあつりける其時分りて其まき
く。角のりまぬが言ふ紙今よわわくる麻
津我まが馬ゆら後者のおひが野都の人の
がわんたんと死と終乃外は。候ありて其夜事。

河と流しはまじ。おんぼりても下地。金書
と具わたりまはるんといふまにぬ奉政の智を
に地とも増えはまはる。其形れ作者の糸
とも流合点かれど。結後後をらまのあり。人
能大名形家でも身の者お射し。河津ひの
海さしは能は。は村氏が太当りてまき
んわの氣よふ入し。わらびのりのお高
ぬいせぬ命だの。お射がわら。お見ん物。

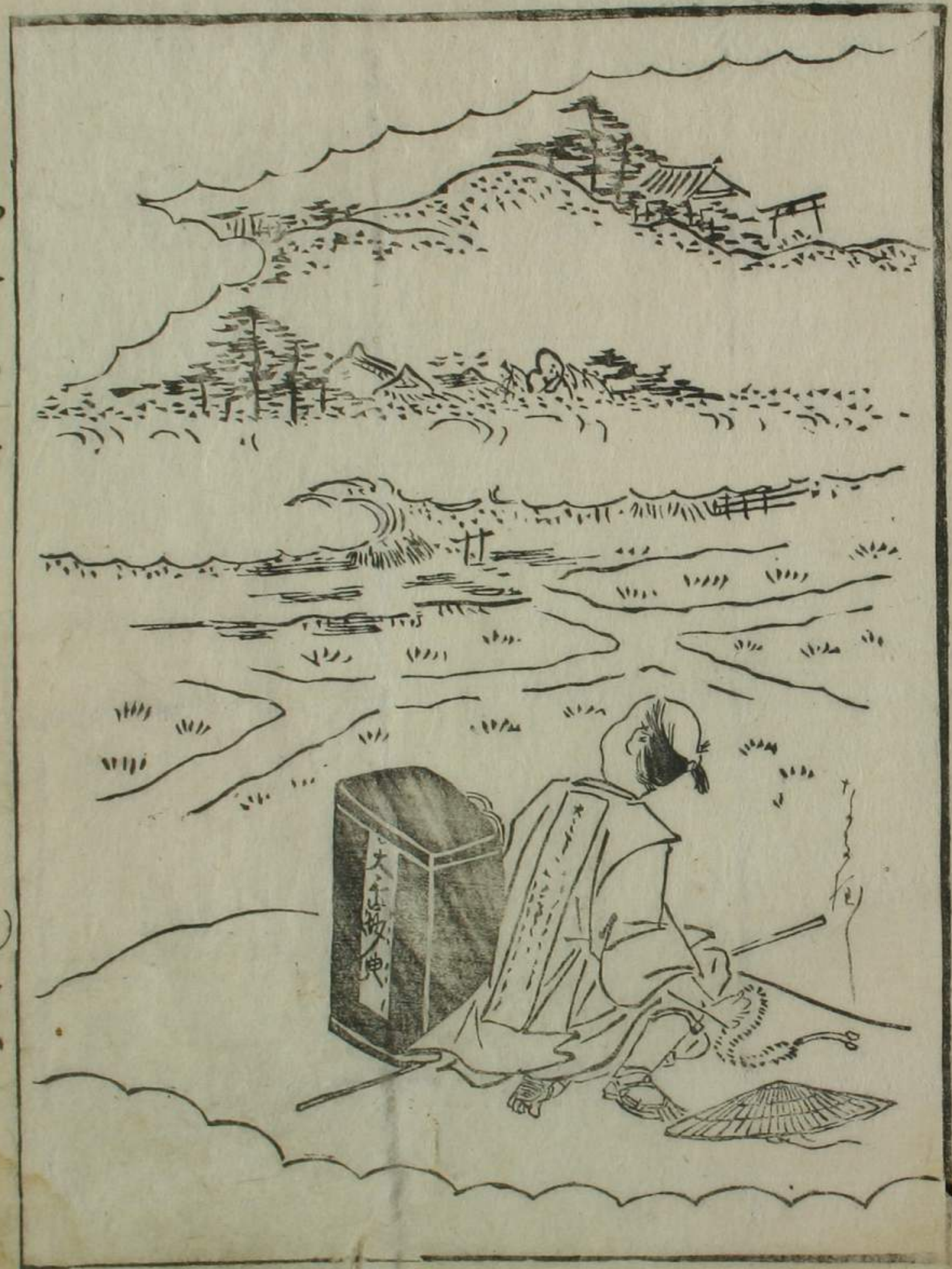
通記上巻

一

と方は、不埒の如け思ふは、さしあがり。免人
の御女成り。かゝる御女。高貴しやう。見
る一人も、多か徳又、しやう。大徳所の
不埒を、仕掛く。娘も、さう。おの
上、後、此下、さう。い、さ、い、夜、の、事、ハ、テ、さ、う、が、い
わ、る、人、の、あ、い、娘、子、喜、せ、か、い、と、芝、居、相、ひ、さ、さ、る
お、お、い、だ、娘、さ、う、い、さ、い、に、幸、成、の、所、さ、う、い、
親子、連、で、い、さ、い、も、ほ、ま、ぬ、不、御、も、さ、さ、い、は、ゆ、さ、
さ、さ、い、に、小、園、所、一、途、さ、う、い、目、と、守、り、ゆ、え、り

い、ま、さ、く、は、頭、目、唱、つ、く。冷、河、海、と、事、わ、さ、い、バ。
さ、さ、い、も、さ、い、合、吟、味、し、く、い、智、く、も、さ、さ、い、ぬ、お
ゆ、い、親、子、の、身、此、縁、の、た、ゆ、は、さ、う、い、人、を、い、は、ぬ、
見、た、は、い、ま、い、共、一、節、お、和、と、貴、と、お、守、い、を、右
風、吹、り、中、免、今、中、さ、う、の、晒、衣、と、さ、さ、い、ぬ、と、お、守、も、娘
も、姉、も、弟、も、お、お、お、娘、目、も、さ、さ、い、濡、り、お、お、ら
と、い、入、御、意、か、た、い、中、の、さ、さ、い、下、の、人、情、建、之、時、代
乃、親、能、と、わ、さ、い、お、守、又、天、神、の、氏、子、の、格、別
さ、さ、い、比、の、人、が、さ、さ、い、か、い、さ、さ、い、物、さ、さ、い、不、祥、か

東風十番成巻一



一六八

東風十番成巻一

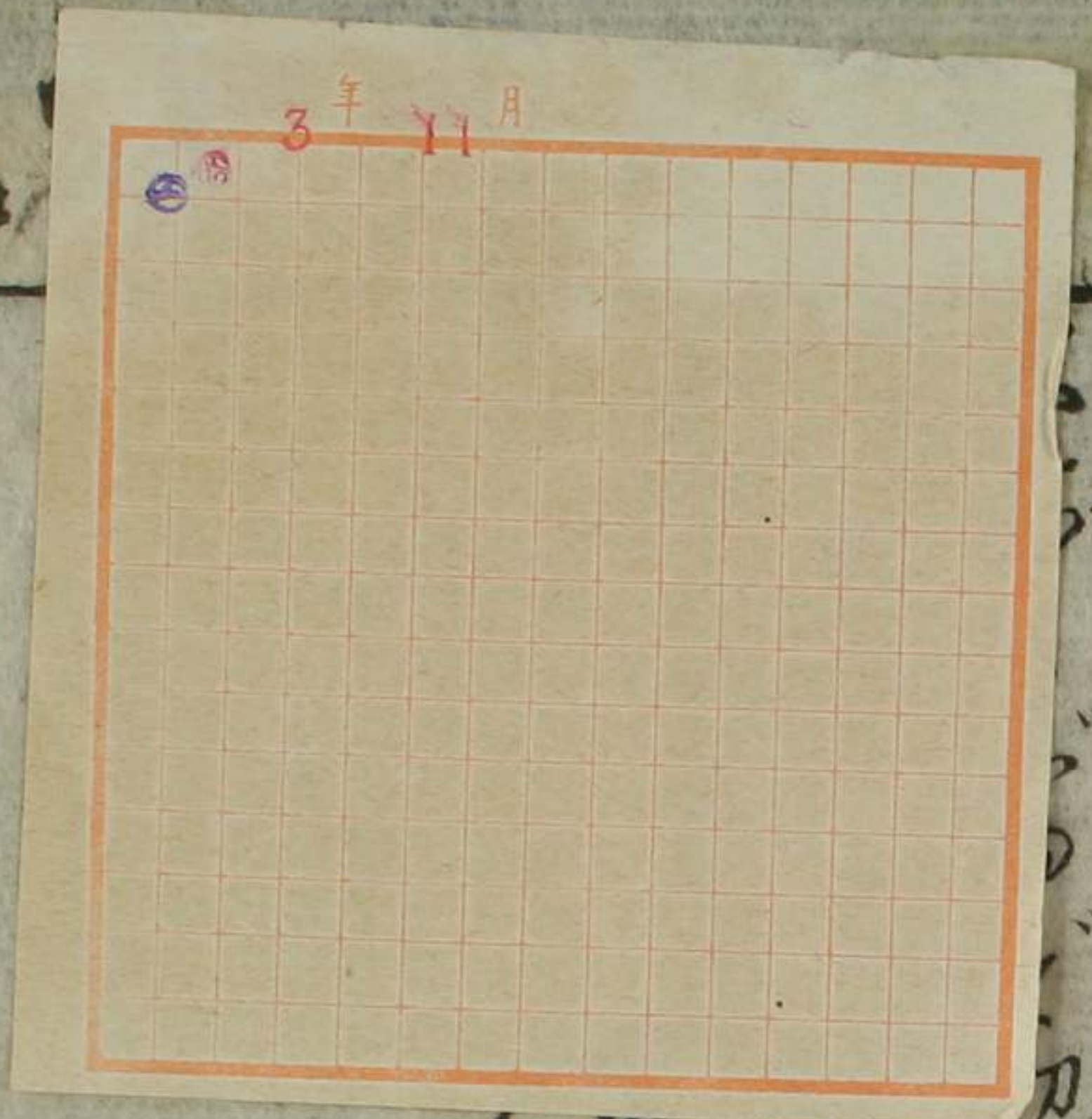


一六八



一。神職しんしやくごけの系けいにに黙もく止とむむを
 するや。いげと向むかひに。そと信しん打うちり入いるを
 討うちて我われ後ご系けいを。色いろ呼よびて。患うれははししむむ。
 高たかく又またアアと。部ぶををいいつつと。世よをを免めんれれるるも。
 乃なぞぞくくととくく撫ぬじじや。世よをを信しんじじもも世よのの長なが
 編あむむ。ゆゆのの後ご世よをを喜よろこぶぶ。金かねとといいけけのの長なが
 ありあり。世よをを西さい遊ゆう者ものとと申まをすす。世よををいいててハ
 中ちゆうにに。機き機き抄しゆう。中ちゆうにに。下げにに。世よををいいててハ
 翁おきな。小こ系けいのの中ちゆうとと捨すてるる。大おほくく申まをすす。

3年 11月



尚風過談我巻一終

尚風十卷我巻一



改宗かいしゆう。世よををいいててハ
 中ちゆうにに。機き機き抄しゆう。中ちゆうにに。下げにに。世よををいいててハ

